

愛媛を中心とした妖怪・幽霊伝説とその不思議・2

もののけ談義

「えひめの伝説 妖怪篇」改訂増補

後編

里の妖怪
えひめの幽霊
妖怪とつきあう

四コマ
マンガ
付き

イラスト・文 土井中照

歴史

歴史
研究
会

はじめに

第一章 川辺・海辺の妖怪 《こちらは前編をお読みください》

【エンコ（河童）】

ガワラ塚・河童の狛犬・エンコの骨接ぎ・緑村のエンコウ皿・浜嵐とエンコ・安土のカワウソ

【龍・大蛇】

竜宮淵・龍神と漁師・矢田の蛇池・うすぐも姫・龍川と大蛇丸・湧ヶ淵

【牛鬼】

加納院の牛鬼退治・牛鬼と兼吉さん・ぬれおなご

【その他の海の妖怪】

第二章 山の妖怪

【天狗】

石鎚の天狗・柚の平四郎・戸たてずの庄屋・天狗の小箱

【山爺・山姥】

山爺と山姥・山姥の人さらい・継子と山姥・山姥の餅つき

【サトリ】

深山のサトリ・アマノジャクとお大師

【ヤマイヌ】

ヤマイヌのお礼・左衛門とヤマイヌ

【その他の妖怪】

ジキトリ・ノツゴ・ウブメ・夜雀

第三章 里の妖怪 《本編収録はここからです》

【狸】

四国に狐がない理由・喜左衛門狸・八百八狸・お袖狸・片目の鯛と狸

【化け猫】

猫又・大藤谷の化け猫

【蜘蛛】

金剛滝の蜘蛛・食わず女房

【高坊主】

うとの高坊主

【おおひと】

大人の足跡

【首なし馬】

御幸寺山の首なし馬

第四章 えひめの幽霊

【お菊の亡霊】

お菊井戸

【ミサキ】

七人ミサキ・村芝居のミサキ

【偉人の幽霊】

これは大事金蓮寺・字信の母の幽霊

【そねみ・妬み】

ひじりんくぼ・妖鬼の面

【その他の幽霊】

幽霊の片袖・松根の生首

第五章 妖怪とつきあう

【疫病退散と妖怪】

当時の人が考えた疫病の原因・妖怪による疫病退散・神による疫病退散

【疫鬼や魔ものから逃れる方法】

自分を守ってくれるものを探す・護符で身を守る・身を清める方法

【異界への入り口】

異界を覗く

はじめに

大人の話して聞かせる怪談を、子供たちが真剣に怖がっていたのは、随分昔のことのように思います。

当時の夜は月や星などの明かりしかなく、夜の世界は漆黒の闇に閉ざされていました。そのなかで起こる不思議な出来事は解明されず、ほとんどが妖怪の仕業となりました。

しかし、時代は移り、科学が信奉されるようになって、今まで不思議だと考えられていた現象は、科学で解明され、妖怪は迷信だと断ぜられるようになりました。

子供たちのあいだで「妖怪」が存在感を持っていたのは、いつの時代までだったでしょうか。各地に残る不思議を伝える伝説や民話が次第に失われてきました。こうした物語を伝えてきた人たちが亡くなったことに加え、家族団らんの時間が少なくなりました。たとえ、団らんの時間が持てたとしても、親から子へ、祖父母から孫へと民話や伝説が語られることはほとんどありません。

怪談をはじめとする不思議な話の根底には、昔の人々の体験や知識、生活の知恵が溢れています。本書に登場する物語にも、時代の変化のなかで残された、さまざまな愛媛の文化が潜んでいます。非合理というだけで葬り去られようとしているこうした物語にこそ、これからの時代に必要な豊かさが秘められているのではないかとも思います。

ごくありきたりな日常から顔を覗かせる怪異や不思議に満ちた物語。平凡な日常に埋没しているからこそ、この世とは異なる価値を持つ、不思議世界の住人⇨妖怪を、かつての人々は恐れ、怖がり、そして愛したのです。

文明の発展によってたどり着いた薄っぺらな社会に幻滅している私たちは、新たなる妖怪の登場を心のどこかで待ち望んでいるように思います。

そこで本書の登場です。

前編には、第一章としてカッパや龍、牛鬼が登場する「川と海の妖怪」、第二章は天狗や山姥などが記された「山の妖怪」を収めました。

後編では、狸や化け猫の第三章「里の妖怪」、お菊井戸やミサキなどが出てくる第四章「幽霊」、妖怪の予言や妖怪退治のおまじないなどを収めた第五章「妖怪のご利益」が登場します。

妖怪や幽霊に関係する愛媛の伝説や民話を、イラストをふんだんに使って紹介し、詳しい解説を施しました。本書をお読みいただいて、妖怪たちの姿とその姿に隠された愛媛の豊か

な文化を知っていただけだと考えたからです。

近年は、伝説や民話の刊行点数が減っています。そこで、思い切って「物語」を要約し、一ページのもののテキストを三百字以内に収めてみました。短くすることで豊かな物語世界が損なわれることも危惧しましたが、私なりに物語のエッセンスをしつかり捉え、ストーリーを際立たせる文章を心がけました。実際に声に出して読んでいただければ、短い中にも物語のイメージが伝えられるのではないかと思います。

また、それぞれの妖怪や幽霊に関連したマンガや、イラスト付きとなっていますので、お楽しみください。

本書は、愛媛県の妖怪伝説を中心に構成していますが、ほとんどの内容は全国に共通するものとなっています。

今回、電子書籍を出すにあたり、アトラス出版さんから出していた『愛媛の伝説 妖怪篇』を構成し直し、新たに第五章「妖怪とつきあう」を追加しました。装いを変えた本書を、ぜひお楽しみください。

また、松山の藩政時代の怪談を短編小説にした越智魔琴著『物の怪がたり』も、風水舎より電子書籍化しておりますので、こちらもお楽しみいただければ幸いです。

令和四年八月吉日 土井中 照

第三章 里の妖怪

四国に狐がない理由(松山市)

昔、道後には湯築城があり、河野のお殿様が住んでいました。ある日のこと、奥方が二人になって、どちらが本当の奥方かわかりません。医者は「離魂病」かもしれないといいます。殿様は二人を座敷牢に閉じ込め、何の食べものも与えず、四日目に食事を出すと、ひとりはずで食べているのに、片方は皿に齧りつきました。正体は古狐だとわかりました。殿様が古狐を殺そうとすると、大小三千の狐が「このお方は四国狐の頭領です。助けていただければ何なりと、言うことを聞きます」と命乞いをします。殿様は、今後四国に住まないことを、狐に約束させました。



そういえば、四国では狐を見かけない

狸は人を化かすといわれます。「狸寝入り」といわれるように、ショックを受けると仮死状態になり、死んだと思つて近づくと、急に動き出すので、人を化かす動物の代表格となりました。

山里に出没する狸は、さまざまなところに姿を見せ、まるで会議をしているように見えます。そして、夜になると眼が光るために人々は不気味な存在であると捉え、当時の人が不思議に思う自然現象を起こすものと考えられたのでした。

この伝説で語られているように、四国で狐はほとんど見かけません。他にも弘法大師が狐のずる賢い性格を嫌ったため、四国から追い払ったという話もあります。その時に、「四国に鉄の橋ができるまで、狐は四国に帰ってきてはならない」といったとも伝えられています。四国に三つの鉄の橋が架かった今、狐の姿がポツポツと見られるようになったといえます。

江戸時代の百科事典『本朝食鑑』の「狸」の項には「老狸は能く変妖して人を食う。もし化けて人間の容かたちになったものには、松や杉の葉を焼いて燻くわせば、本の形を露わす。また山家に入り炉辺に坐り、人の眼を偷んで火に向かうものもあり、暖まるにつれて陰囊おんなんを展ひらばす。

それは広くて長さ四・五尺もありやもすれば児女を包んでたぶらかし、害をなす。またよく人に馴れ、人語を話し、陰晴を卜い、時変を告げるものもあり、やはり怪物である」と書かれています。

しかし、狸は間の抜けたイメージがあり、行動がユーモラスに感じます。そのためか、狸には怖い妖怪として認知されていないようです。

喜左衛門狸 (西条市東予)

大喜味神社に住んでいた喜左衛門狸が、讃岐の金比羅山へ行き、屋島の禿狸と腕比べをする事になりました。禿狸は、自分の体毛を抜くと、源平合戦が始まりました。喜左衛門狸はびっくりしましたが、禿狸は「次はお前の番だ」と迫ります。喜左衛門狸は、紀州の大名行列がもうすぐだと知っていたので、禿狸に勝負を待ってもらいました。大名行列の日、禿狸は見事な行列に驚きました。「喜左衛門狸よ、見事に化けたな」と声をかけると、警護の侍が禿狸に斬りかかってきました。禿狸は喜左衛門狸にだまされ、屋島に逃げ帰りました。



狸の化かし方を分類すると…

愛媛では、狸に化かされたという話がたくさんあります。「婚礼の帰りに不思議なことが起こるので、それを見ていたら引き出物を食べられた」「ゆけどもゆけども目的地に着かない」「今までいた人物の姿が急に見えなくなった」「風呂呂や座敷と思っていたら田んぼの中だった」「突然踊り出し、そのことを何も覚えていない」など、多種多様な話が語られています。

精神医学者の中村希明はその著書『怪談の科学』でこれらの化かされた話を「感覚遮断性幻覚」だと説明しています。闇夜のように同じような状態が続くと注意を集中することが困難になって断片的な思考しかできなくなり、判断力がなくなり知覚障害、認識障害が起こって幻覚を見るそうです。まして、飲酒や睡眠不足、疲労などがあればさらに幻覚を見やすくなるということです。

狸に化かされたという話の大半は、日頃の不摂生による失敗を、狸のせいにしてごまかそうとしたのではないかと考えられます。

また、柳田国男の『狸とデモノロジー』には「元来人をたぶらかすには目を欺くと耳を欺くとの両種あるが、狸は主に耳の方である」と書き、山奥で木が倒れる音がする「天狗倒し」や汽車の音、腹鼓の音がする「狸囃子」などを挙げています。

狸と狐



狸と狐の化け比べ

